教學院報

2020.6.1
第94号
真宗高田派教学院

この題字は宗祖聖人八十六歳の時にお書きになられた『尊号真像銘文』（本山蔵）の文字から作成したものです。

ABC予想

第三部会主任　大河戸悟道

コロナウイルスが世界中を席巻している中これを書いています。ニュースではどこもコロナウイルスに関するものばかり。そんな中、京都大学の望月新一教授が数学の超難問といわれる「ＡＢＣ予想」を証明したという記事が目にとまりました。私は数学など元来大の苦手（ルート以降はお手上げ）ですが、数学そのものに対しては目に見えない世界を数式でもって解き明かす探検家や魔法使いのようなイメージを持っています。

この度の「ＡＢＣ予想」の証明の報道を聞き、私なりに調べてみましたが、どれほど噛み砕かれた解説も私には結局理解不能でありました。なんせ望月教授の論文が正しいのか確認するために専門家が集まって精査しても８年もの年月が掛かったというのですから、この私に手に負えるはずもありません。

さてこの「ＡＢＣ予想」と呼ばれる理論は一九八五年に提唱され、その後は証明されることを待たずして、様々な理論を成り立たせる演算に用いられてきたということです。つまりこの度の「ＡＢＣ予想」の証明がされたことでその他の理論も連動して証明されることになるのだそうです。

その昔、釈迦如来は『無量寿経』の中で、阿弥陀如来の本願によって念仏するものは必ず往生を遂げるとお示しくださいましたが、その教えが証明されるまでには長い年月が必要でした。それはインドから中国をへて日本に至り、親鸞聖人のもとでようやく「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳をなす正智、難信金剛の信楽は、疑いを除き証を獲しむる真理なり」と決着するのです。実に千七百年もの月日が必要でした。

ところが私たち一人ひとりの上ではお釈迦さまのみ教えも、聖人のお言葉も仮説のまま放置され、せっかく証明されておりながら、それを頂戴しようとしない状態のようです。

ただし心配ご無用、阿弥陀さまはそんな私たちのことは百も承知でありますから、理解せぬまま念仏申す姿にさえよろこび願ってくださっていることでありましょう。

研究員のひとこと

三だけ主義

第一部会　堤　正史

新型コロナウイルスで大変ですが、今回の出来事はこれまでの私たちの生き方への警鐘かもしれません。

米国のトランプ大統領は経済活動再開を優先したいようですが、そのために死者数は現在の二倍以上の十九万人に膨らむとの予想が出ています。人命より経済ということでしょうか。一方、震源地だった中国は強権で都市封鎖を実行、一応治まったので医療援助を名目にあちこちに勢力を伸ばそうとしています。二大大国の行動がまさに現代のあり様を示しているようにも思います。

今だけ、カネだけ、私だけ。これを「三だけ主義」と言うそうです。六十人の大富豪が三十億人分の資産を握っている、強欲資本主義、格差社会ここに極めり。しかし、三だけ主義は本当に欲ばりなのでしょうか。なんとも遠慮深いように思います。

今だけ。今が健康で楽しければいい、いやーな過去は振り返りたくない、終わりが待っている見通せない先のことも考えたくない。しかし、仏さまの教えはケチではありません。過去・現在・未来すべての時を満たしてくれます。永遠の命の教えです。

私たちの人生は始めも、終わりも思い通りになりません。生まれて来たいかどうか問われた覚えはないし、老いたくないの、死にたくないのに必ず老いや死は訪れる。しかし、命が思い通りにならないということは、私たちの思いでは左右できないゆるぎない働きがこの命を包んでいるということではないでしょうか。阿弥陀仏とはこの永遠無限の宇宙的生命の働き、阿弥陀さんの命がこの私の命とつながっているといただけば、つらいこと悲しいことがあっても大丈夫という大きな安心が届きます。

カネだけ。これが食べたい、あれが欲しい・・・欲望なしには生きていけません。おカネはそうした欲望の大半を満たしてくれます。だが、そうした満足は長続きしません、欲が欲を呼びかえって欲に振り回され苦しくなることだってあります。「たとえおカネの雨が降っても、欲望は満たされない。快楽は短くて苦痛である」（ダンマパダ）本当の安心はカネでは買えないようです。

私だけ。何より大切なのはこの私。私を粗末にしてはならない。いまふうの言い方なら自己肯定感こそ生きる力のもと

ということでしょう。たしかに、そうです。しかし、この私は「私だけ」ではありません。父母や先祖はもちろん、まだ見ぬ未来の人たちともつながっています。人だけではない、生きとし生ける一切のものとつながっているのがこの私です。大震災などで「見ず知らずの人」に助けてもらったという多くの声を聞きます。これも見えないところでつながっているから起こることです。「無縁の大悲」こそ仏の大慈悲です。

三だけ主義と遠慮せず、仏さまに手を合わせましょう。ナムアミダブツ　ナムアミダブツ・・・・・

真慧上人が書かれた文類さん

第四部会　安藤章仁

「西方不可思議尊」ではじまる私たちにとって一番親しみのある文類さんは、『浄土文類聚鈔』におさまる偈文で、正式には「念仏正信偈」と言います。親鸞聖人の自筆本は現存せず、湖東平野の日野に伝わる古写本を底本としています。ところが、このたび真宗高田派寺院から真慧上人が書写された『浄土文類聚鈔』が発見されました。しかも真慧上人が確実に親鸞聖人直筆本を書き写されていることが判明しましたので、これからは、親鸞聖人ー真慧上人と相承された文類さんをいただくことができます。奇しくも五十年毎の法然聖人、親鸞聖人、真慧上人の大恩忌が同年になることとあわせて、大いなる佛縁のよろこびです。

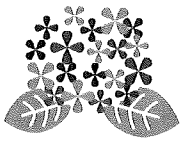
新発見の『浄土文類聚鈔』によって大きく二つのことが明らかになりました。一つは、真慧上人の文字情報です。真慧上人の筆跡に関する先行研究は皆無に等しく、未だ『影印高田古典』にも取り上げられていませんので全貌は不明です。その問題の大きさは、代表的な真慧上人自筆の名号や典籍を見比べれば、自ずと知らされます。今回、聲朋会の読書会の一環として二年をかけた調査で真慧上人の文字をデーターベース化し、特殊な文字を一字一字辞書で確認しました。その結果、真慧上人が親鸞聖人と同じくオリジナルの文字を創作していることと、親鸞聖人が依用しない異体字や「高麗版八萬大蔵経」にのみ使用される文字までも習得されていることがわかりました。

二つめの新知見は、最重要です。それは、新発見の『浄土文類聚鈔』には、真慧上人によって親鸞聖人の前期筆跡、中期筆跡、後期筆跡が忠実に書き写されていることです。この事実によって、文類さんと正信偈さんのどちらが先に書かれたかという問題に決着がつくことになります。従来、広書（「正信偈」を所収する『顕浄土真実教行証文類』）と略典（「文類偈」を所収する『浄土文類聚鈔』）の撰述の前後関係が問題となり、内容、構成、用語例、古写本の奥書といった観点から広前略後説と略前広後説が主張され、未だ確定するには至ってはい

ません。しかし、真慧上人の書写状況に基づけば、その底本となる親鸞聖人真筆の『浄土文類聚鈔』は、『顕浄土真実教行証文類』と同じく長い年月をかけて執筆された書物であったことがわかります。

活字の勤行本に慣れていますと、底本にまで関心が向きません。もちろん書誌的な問題より、法味をいただくことが第一義であることは言うまでもありません。けれども、先達方が大切に伝持された親鸞聖人真蹟本をはじめとする聖教を底本として日常勤行できるのが高田サンガのありがたいところです。親鸞聖人から七五〇年後、真慧上人から五百年後にそのことの意味を再確認でき、文類さんの成立過程、すなわち親鸞聖人が生涯を通して書かれた書物であったことを知り得たのは、盲亀浮木に値う法縁だと思います。

※新発見の『浄土文類聚鈔』に関しては、「仏教タイムス」『印度學佛教學研究』『高田学報』を参照ください。



講座案内

教学院各部会公開講座

第一部会

第９期　真宗入門講座　「聖人のみもとに帰ろう」

テーマ　「讃阿弥陀仏偈和讃（浄土和讃）に聞く」

新型コロナウィルス感染防止のため無期限延期

第二部会

第24回　仏法と現代を考える集い

新型コロナウィルス感染防止のため中止

第三部会

布教伝道研修講座

新型コロナウィルス感染防止のため中止

第四部会

新指定重要文化財講座

新型コロナウィルス感染防止のため中止

聴講希望者は教学院まで問い合わせて下さい